
君に桜餅をあげる

こぬか雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に桜餅をあげる

【Zコード】

Z4944BA

【作者名】

こぬか雨

【あらすじ】

孤児が狐の化身に助けられながら成長していく話。

お寺を守る狐に支えられながら、高校生の那奈は食堂を経営する毎日。でも放課後しかやっていないこともあって食堂にはお客様さんが来なくて、那奈は落ち込みっぱなし。

それを元気付けようと必死な狐やクラスメート達のほのぼのストーリー。

プロローグ 「今日と翌日の境田」（前書き）

登場人物は女の子が多いので予めご了承下さい。
残酷なシーン等はありません。
どちらかといつとほのぼの系を描しております。

プロローグ 「今日と明日の境目で」

水滴が一粒、額に落ちてきた。一瞬で弾けたそれを手で拭つて、女の子は呟く。

「雨か……」

それはなんてことない平凡な言葉なのに、何故か特別な色を帯びて辺りに響いた。

次第に雨音が大きくなつて、彼女の髪を手を足を濡らしていくのに、彼女はじっと空を見上げている。ジャングルジムのつぶんで足を揺らしながら何をするでもなく。ただひたすらに空を見上げている。彼女の頭上、遙か彼方から落ちてくる大量の雨粒が、彼女のいる小さな公園に八つ目の水溜まりを作つた頃、彼女は不意に空を見上げるのをやめた。

「今日も来たの？」

真つ直ぐ見つめるその先には、赤い傘を持った一人の女の子。着物姿のその子はジャングルジムの彼女よりずっと年下のようで、おかっぱ頭を縦に振つた。

「濡れるよ」

その子は公園の中に入るでもなく、かと言つて離れた場所にいるわけでもなく、道路と入口の境目辺りに立つたまま言つた。

あはは、と渴いた笑いを漏らして女の子がジャングルジムから飛び降りた。

「もうとっくにびしょ濡れだよ」

彼女はそのまま女の子の方に歩いてきて、それを待つていたかのように女子は歩き出す。

「怒ってる？」

しばらく前後になつて歩いていると、年上の方の女の子が躊躇いが

ちに聞いた。

「別に」

素つ気ない返事に内心苦笑しながら女の子は確認してみる。

「そう?」

「そう」

「そつか

「うん」

その後は大した会話もなく、夜の街を一人の女の子はてくてく歩いていった。着物の裾を邪魔くさそうに蹴りながら歩く女の子は傘の下から後ろの女の子を何度も振り返るけれど、当の本人は止みかけた雨とにらめっこをしていて全然こっちを見てくれない。ふて腐れて歩調を速めた女の子の足がアスファルトを鳴らす。

これは、土曜日から日曜日に変わる頃のこと。

第一話 「狐寺」

「とりあえず着替えないと、あちこちがたの来ていそつなお寺の前まで来ると、着物の女の子は言つた。

「そだね」

言われた女の子は今はすっかり止んだ雨のせいで体に張り付いているシャツをつまむ。体にぴっちり張り付いているから、女の子のプロポーションの良さがよく分かつてしまふ。おまけに中が透けていて、よく平然と街中を歩けたな、と感心してしまふような格好だ。二人はそのままお寺の中に入つて、というよりもお寺の中を抜けて裏にあるおんぼろな小屋の中に入つて、囲炉裏に火を焚いた。

「しつかし電気もないなんて見捨てられたにしても酷すぎるよねー」「文句があるなら帰つていいよ」

「嘘です、嘘です、追い出さないでーっ」

涙目になつた年上の女の子を見て、着物の女の子はくすぐすと笑い出した。笑いながら箪笥から紫の着物を取り出して女の子に渡す。

「ありがと」

むすつとした顔のままそれを受け取つて、着替え始める。その横で衣擦れの音を聞きながらうとうとし始めた着物の女の子の頭から突然ぴょこんと耳が飛び出した。続いて尻尾もふさふさと出てきた。

「おーい、きつねちゃん。耳と尻尾が出ましたよー」

女の子ははつとして耳と尾を仕舞う。その顔が見る間に赤くなつた。

「まだ油断すると駄目だねえ」

「つ…うるさい…まだ修行中なんだからしょづがないでしょつ」
ムキになる狐耳の女の子に更に畳み掛ける。

「今日は折角大人っぽい子目指してたのにねー」

「べ、別にいいじゃん！もうお寺の中なんだしつ」

「頑張ったのが台無しだねえ」

「頑張つてなんかいませんーー！狐だからって馬鹿にするなーー！」

「ごめんごめん」

火の赤っぽいほんやりとした光に包まれた小屋の中、一人のやり取りが微笑ましい。真夜中に忘れ去られた寺から笑い声が聞こえたら不審がられるだらうが、幸い此処は田舎で、誰も起きてなんかいない。

暫くしてやつと一人が落ち着くと、狐耳の子はぽつりと寂しげに咳いた。

「どうしてあたしを頼るつとしないの…？いつもいつも我慢ばつかして」

ぱちぱちと火花を散らす囲炉裏に半ば挿き消されたその言葉は、それでも向かいにいる女の子に届いた。

「ん……ごめん。なんかやつぱり悪いよつな氣がして」

「全然悪くなんかないよ」

「うん」

「だつてあたしは」「分かつてるつて」

このおんぼろ寺が今もこうして残つてるのも、私がここまで大きくなれたのも全部あなたのおかげだつてちゃんと分かつてるよ。女の子は喉まで出かかった言葉をその先に出せずに寛昧に笑つた。

「寝よ？あんずちゃん」

「あたしあんずじやないよ、那奈」

「だつて、狐に名前、ないんでしょ？」

「ん、まあね」

「今日はあんずでいいじゃん」

「明日もあんずでいいよ」

「これからもずっとあんずだね」

「うん」

たつた今あんずと命名された狐は囲炉裏の火を消して、一つの間に敷いてあつた布団に潜り込んだ。那奈と呼ばれた女の子もその布団

に潜り込む。

「どうして今まで名前付けなかつたんだううね」

那奈は真っ暗になつた小屋を見渡しながら誰に尋ねるでもなく言つた。

「さあ？」

あんずは答へながら小さく欠伸をした。つられて那奈も大欠伸。

「おやすみ、あんずちゃん」

「おやすみ、那奈」

二人の寝息とたまに葉から落ちる水滴の音以外、何も音がなくなつて、街は夜明けまで息を潜める。

* * *

「ん……」

隣から聞こえる食器の笑い合ひ音で那奈はうつすら眼を開けた。外はまだ薄暗く、空氣は冷えきつている夜明け前。むつくり起き上がり隣に目をやると、あんずが朝御飯の支度をしている。

「あ、おはよ」

那奈の視線に気付いたあんずが彼女に柔らかく微笑みかけた。

「おはよ」

割烹着を着たあんずが小屋の内外を行つたり来たりしている間、那奈はぼんやりした頭であんずのことを考えていた。

狐に「」飯作つてもらうなんて考えてみるとなかなか面白い光景だよなあ。あんずちゃんが人間だつたらよかつたのに。そしたらもつともつとお喋りしたり出来るのになあ……。

「ト。

不意に、静かに目の前にお盆が置かれた。紅いお椀に入つたお味噌汁と真っ白なご飯から白い湯気が立ち上つてゐる。おかずは煮物と沢庵だけというシンプルな朝食だが、一見するだけであんずの真心が伝わつてくる。美味しそうな匂いに鼻を擽られて那奈が箸に手を

伸ばすと、全て見透かしたような平坦な声をあんずが喉から絞り出した。

「あたしは人間にはなれないし、なる気もないよ」

沢庵を口に入れながら那奈が答える。

「ふん。わはつてふよ」

もぐもぐりくん。黄色い塊を超特急で胃に押し流して言い直す。

「うん。分かつてるよ」

ここに一旦間を置いて、「あんずちゃんは昔から私の心が読めるよね」とちよつと拗ねたように付け足した。

「あたしが狐じや嫌?」「

黙々と箸を進めながらあんずが悲しそうに聞いた。おかげば頭の下から上目遣いの大きな瞳が覗いている。

「つうん、そんなことないよ!」

慌てて手と首を横に振る那奈に、あんずはため息を吐いた。

「あたしもいつかはいなくなっちゃうから。そのことは忘れないでね」

なんとなく氣まずい空気が小屋に立ち込めて、だんだん日が昇つて辺りが明るくなってきて、昨日の雨なんて忘れたみたいに子供のはしゃぐ声が聞こえてきた頃。もつすつかり乾いたシャツに着替えた那奈が立ち上がった。

「じゃあ私、今日はもう帰るね」

「うん。もう一人で我慢したりしないであたしに頼つてね」「分かつてゐるつて

そう言いながら絶対頼つてくれないんだから、と口を尖らすあんずと、それでも私自立しなきや、なんて瘦せ我慢をする那奈が、今日は珍しく背中合わせでお別れした。

* * *

まだ水溜まりの残る道路を重い足取りで歩く。鳥は歌い子供は遊んでいるのに、どうしてだろう彼女は俯き加減。

大好きなんだよ。大好きで大好きでほんとどうしようもないくらいなの。だけど、甘えてばっかいられないじゃん。やつぱこのままじや駄目だつて思うんだよ。

最後の方は投げ槍になつて、頭に浮かぶ言葉を片つ端から蹴りながら歩いた。折角雨粒でドレスアップした木々にも、鳥の大合唱のステージになつている電線にも彼女は目もくれない。途中で昨日の公園を通り過ぎた時だけちらりと顔を上げたけれど、それ以外は一回も。

やがて『桜食堂』と書かれた看板の前に行き着くと、引き戸をけたたましい音と共に開けて中に入つていった。そこは那奈の家みたいなもので、那奈が一人で切り盛りしている。開店してから早六年、未だお客様なしという、逆の意味で街で評判の食堂だ。

元々この田舎では外で食べるという習慣がなく、わざわざここまで来を運ぶ人などいないのだ。来る者といえば、ただ食いの狸やら鼬やら、そんな者ばかり。そもそも店仕舞いしようと思いつつ、一人くらいのお客さんが来てから……とずるずるここまで来ているという次第だ。

白い壁にぽつかり空いた丸い窓からふわふわと入り込んでくる気ままな光。それに照らされてどこか懐かしく佇んでいるテーブルと丸椅子に、那奈はどさりと倒れ込んだ。

「今日は誰か来るかなー……」

分かつてはいても咳かずにはいられない、寂しい響きが緩やかに消えていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4944ba/>

君に桜餅をあげる

2012年1月14日18時45分発行